

3 本多勝一

この著者の単行本を70余冊(内「本多勝一集」30巻を含む)、そして文庫本ジャンプのデザインを40冊以上を手がけている。著者個人にかかわる仕事としては、最多の点数を誇る。『極限の民族』(朝日新聞社、1967)以来の早い時期からのつながりで、その結果、著者による出版物の相親を決定的に印象づけた点で最たる効果をもたらしたと例であると思われる。

この著者にかかわる意匠の場合、例外はあるが、強いゴシック書体を題字に用いることである。ゴシック書体を持つクールで直截が伝達力を最大限に引きだしているのだが、その処理に当たっては、字詰めに限らず、書体、字体そのものを執拗なまでに「いじって」いるので、一朝一夕には真似のできない強い効果を生み出した。この強い訴求力を再現すべく、自身のゴシックを用いて背文字等に使う作例が、他の装丁家によって用いられている例を散見するが、大方は文字がその期待に応えていないことが多い。



3-01



3-01 | 本多勝一著『側殺される側の論理』カバー

ゴチは、表情がたっぷりないから、装丁の文字としては抜いにくいのだが、その点、朝日の新聞活字の見出し用ゴチはなかなかよかった。(中略)朝日ゴチをもとにして、ぎりぎりせいはいっぱい極木の文字をつくることとなった。誰だか冗談に「タムホソタ・ゴチ」などと言ったものである。やがて本多勝一文庫が續いて刊行されるが、いずれも朝日ゴチに、いづらか明朝体風のアクセントをつけることによって表情を工夫した。



3-02



3-03



3-04



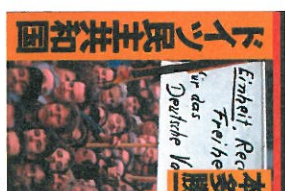
3-05



3-06



3-07



3-08

3-02 | 本多勝一著『戦場の村』カバー

3-03 | 本多勝一著『極限の民族』カバー

3-04 | 本多勝一著『北爆の下』カバー

3-05 | 本多勝一著『北ベトナム』カバー

3-06 | 本多勝一著『戦争を起さる側の論理』カバー

3-07 | 本多勝一著『カボチはいつまでいるのか?』カバー

3-08 | 本多勝一著『ドイツ民主共和国』カバー

3-09 | 本多勝一、武田文男編『植村直己の冒険を考える』カバー



3-09